

グスタフ・マイリンク『ゴーレム』におけるゴーレムの役割 ——病の隠喩として——

中 岡 翔 子

はじめに

グスタフ・マイリンクはプラハに伝わる人造人間ゴーレムの伝説に取材して、長編小説『ゴーレム』（1915）¹⁾を執筆した。しかし、この小説におけるゴーレムは、伝説上のゴーレムというよりも、主人公のドッペルゲンガーとして登場するかのように見える。フロイトは、ドッペルゲンガーのモチーフを外見上の一致から相互に知識や感情や体験を共有し合ってしまうこと、ないしは自己を自己以外の他の人物と同一化してしまうような一連の現象と呼んでいる。²⁾ こうした感情面を強調する心理学的な解釈に従えば、ドッペルゲンガーとは、自我の病んだ部分であり、自我の発達を妨げるものとみなされる。自我はその病を乗り越えるか、これを切除しなくてはならない。それゆえたしかに、この小説の主人公は、精神的な成長を遂げるため、ドッペルゲンガーを乗り越えるのだとすることができる。³⁾

この小説のドッペルゲンガーの問題に言及する先行研究もまた、マイリンクのゴーレムを、ユダヤの伝説の領域にではなく、心理学の領域に還元し、以上のようなドッペルゲンガーの定義をゴーレムに適用してきた。⁴⁾ ユダヤ神秘主義研究の第一

¹⁾ グスタフ・マイリンクの作品については次のテキストを使用し、引用は括弧内に頁数のみを記した。Meyrink, Gustav: Der Golem. Leipzig (Wolff) 1916.

²⁾ Vgl. Freud, Sigmund: Das Unheimliche. Bd. 12, Werke aus den Jahren 1917–1920. In: Freud, Gesammelte Werke in 18 Bänden. Hrsg. von Anna Freud. London (Imago) 1947, S. 246. グリムの辞書には、ドッペルゲンガーとは「同一時刻に異なる二つの場所に現れると思われる人」もしくは「別の人と簡単に取り違えられるほど似ている人」と説明されているだけである。Vgl. Grimm, Jacob und Wilhelm: Deutsches Wörterbuch. 16 Bde. Leipzig 1854–1971. Bd. 2, Art. „Doppelgänger“, Sp. 1263.

³⁾ ヴェルナー・ヴェルツィヒは、この作品を発展小説として評価している。ヴェルツィヒは、20 世紀文学において教養小説ではなく発展小説というカテゴリーが必要であることを強調する。なぜなら、従来の小説において自明とされてきた世界と自己との相互関係は、20 世紀文学においては失われ、文学の目的は、教養小説が眼目においた若者の教育ではなく、年齢にかかわらず自己発見に変わったからである。Vgl. Welzig, Werner: Der deutsche Roman im 20. Jahrhundert. Stuttgart (Kröner) 1967, S. 15 f. 同様に今泉文子は、「この小説をドイツ固有の教養小説の系譜に数え入れるものもあるが、価値の転倒したこの時代、良き人間になることはもはや良き市民になることを意味しない」ということを指摘している。今泉文子：グスタフ・マイリンク『ゴーレム』——ゴーレム伝説の街プラハに繰り広げられる魂の彷徨の物語〔『国文学』学灯社 1989, Vol. 34, No. 15, 154～157 頁〕157 頁。

⁴⁾ この小説におけるドッペルゲンガーの問題に言及する先行研究には、以下のようなものがある。Vgl. Bär, Gerald: Das Motiv des Doppelgängers als Spaltungsphantasie in der Literatur und im deutschen Stummfilm. Amsterdam (Rodopi) 2005, S. 386 f.; Mayer, Sigrid: Golem: die literarische

人者ゲルシヨム・ショーレムによる以下の指摘も、この作品のドッペルゲンガーに注目する解釈の一つの例である。⁵⁾

このゴーレムの一部は、幽霊じみたものの淀んだ残滓すべてをそなえたゲッターの具現化された集団の靈魂である。また一部は、芸術家たる主人公のドッペルゲンガーである。主人公は自我の救済をもとめて努力し、その過程で彼自身のいまだ救済されざる自我であるゴーレムをメシアのように浄化する。⁶⁾

ここでゴーレムは「集団の靈魂」であると言われているが、それもまた、ゲッターを一つの集団ないしは全体とみなすならば、そのドッペルゲンガーであると言える。つまり、ゴーレムは、個人と全体とのふたつの意味においてドッペルゲンガーである。したがってショーレムの見解に従うならば、この小説において主人公のまゝに現れるゴーレムは、ゴーレム伝説の類型というよりは、ドッペルゲンガーを題材とする小説のバリエーションの一つとみなされる。ここで本稿が注目したい点は、主人公がゴーレムを「浄化する (reinigen)」という箇所である。ショーレムがここで用いた「浄化する」という表現は、主人公のドッペルゲンガーであるゴーレムが、何らかの洗い流されねばならない汚れや穢れ、ないしは罪を背負っていることを示唆する。そして、このようにゴーレムを、主人公の自我の影の部分として同定することから生じた結果が、ゴーレムを異物ないしは障害として扱う一連の研究態度であった。このことは、ゴーレムが「集団の靈魂」と呼ばれた場合にも合致しており、ゴーレムは、「淀んだ残滓」としてゲッターの住人たちの不安を表出するのである。

しかしながら、ゴーレムに関係する出来事をこの小説から拾いあげてみると、ゴーレムがドッペルゲンガーであるというだけでは説明のつかない箇所がある。マイリンクがこの作品にゴーレムという素材を用いた理由は、こうしたドッペルゲンガーとしては説明のつかない箇所から求められねばならないだろう。個々のディテール

Rezeption eines Stoffes. Bern u. Frankfurt a. M. (Lang) 1975, S. 206 f.; Rosenfeld, Beate: Die Golemsage und ihre Verwertung in der deutschen Literatur. Breslau (Priebatsch) 1934, S. 158-168.; Held, Hans Ludwig: Das Gespenst des Golem. Eine Studie aus der hebräischen Mystik mit einem Exkurs über das Wesen des Doppelgängers. München (Allgemeine Verlagsanstalt) 1927. こうした先行研究は、ドッペルゲンガーとしてのゴーレムを主人公の自我の敵対者とみなしている。

⁵⁾ ただしショーレムが、この小説の主人公とユダヤの伝説との関連を否定する背景には、小説出版当時の社会的状況が影響しているとも考えられる。というのも、マイリンクは、『ゴーレム』の出版が第一次世界大戦の最中であつたこともあり、当時、国粹主義的反ユダヤ主義者たちによる激しい抗議運動に巻き込まれているからである。Vgl. Binder, a.a.O., S. 558-567.

⁶⁾ Scholem, Gershom: Zur Kabbala und ihrer Symbolik. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1998 (Erste Auflage 1973) [以下, KS と略記] S. 210.

ルの分析を通して分かることは、ゴーレムが、主人公やゲッターの住人たちにとっては、必ずしも「浄化」されるべき対象ではないということである。むしろ、この小説のなかでゴーレムは、毒をもって毒を制するような役割を担うことで、主人公の内面的な成長やゲッターの人々の自立を促している。この意味で、ゴーレムは主人公によって浄化される存在ではなく、ゴーレムこそ主人公を浄化する存在であると言えるのではないだろうか。こうしたゴーレムの積極的な役割を明らかにするために、本稿では、この小説におけるゴーレムと主人公、ゴーレムとゲッターの住人たちとの関係についての新しい解釈を提示する。

1. 故郷喪失のシグナル——思考の表出としてのゴーレム

1.1. ゴーレムと主人公

たしかにこの小説においてゴーレムは、主人公のドッペルゲンガーとして主人公の内面的な成長を妨げる障害として描かれている。主人公アタナシウス・ペルナートは、失恋の痛手から催眠療法を施され、記憶を消された状態でゲッターに暮らしている。ペルナートは、この記憶喪失の状態を「故郷喪失者」（95）と呼ぶことで、自らとゴーレムとの間に類似点を見出している。伝説によると、ゴーレムとは土から成る人型にラビが生命を与えた人造人間であるので、当然ゴーレムには、生みの母親も、故郷もない。この点で、記憶を喪失し、母親の顔も、どこに暮らしていたか思い出せないペルナートは、ゴーレムと同じ状態にあると言える。

たしかに、ペルナートにとってゴーレムと同じ状態になることは、過去から逃れるために必要なことであり、催眠療法によって意図的に作り出された状況なのであるが、本論の冒頭でも示した通り、こうしたゴーレムとの共通点はペルナートにとって内面的な成長を妨げる障害として機能している。そしてこの障害もまたゴーレムの伝説と無縁ではないことが小説では次のように書かれている。

わたしは精神錯乱に陥っていたのだ。催眠療法が用いられ、わたしの脳の一連の居間に通じる「部屋」に錠がおろされた。それでわたしをとりまく生活のまったなかでわたしを故郷喪失者にしたのだ。（94 f.）

ここでペルナートの脳のなかの「部屋」は、封印された過去の記憶に通じており、ペルナートはこの鍵のかけられた「部屋」に閉じ込められた状態にある。さらにこの括弧付きの「部屋」において、ペルナートはゴーレムとの関連に気づくのである。

一時間ほど前にツヴァックが語っていたゴーレムの物語がわたしの頭に浮かび、突然わたしはあの見慣れぬ男が住んでいるらしい出入口のない伝説めいた部屋と

わたしの意味深長な夢との間の、途方もなく不可思議な連関を知った。（95）

ペルナートの頭のなかの「部屋」は、土塊に戻されたあとにゴーレムが安置された「出入口のない部屋」に対応している。ゴーレムが住むという「出入口のない部屋」は、ペルナートが置かれた状態、つまり外界との接触の遮断と孤立した状態を象徴している。つまり、ペルナートの存在は、ゴーレムの存在によって規定されているのである。

1.2. ゴーレムとゲッターの住人たち

主人公ペルナートの前に現れたゴーレムは、ゲッターに住む人々にも一貫して影を落としている。先祖代々ゲッターの住人であるツヴァックは、ゴーレム伝説を語り継いできた市井のユダヤ人であるがゆえに、ゲッターに住む人々のゴーレム観を代弁している。そこでツヴァックの語るゴーレムをこの小説における一般的なゴーレムとしてここで引合いに出したい。

むし暑い日に電圧が耐えられないところまであがり、しまいには稲妻を生むように、ここゲッターの空気を汚すいつまでも入れ替わらない思考の絶えざる蓄積のあとにも、突然の衝撃的な爆発が起こらないとはいえないだろう——つまりそれはわれわれの夢の意識を白日のもとに駆り立てるような魂の爆発で——自然界では稲妻を——ここでは幽霊を生むんだ。もし形として現れる秘密の言葉を正しく解釈することを心得ていたら、きっとこの幽霊は、その顔つきに歩きかたに、態度に、その他あらゆる点において、集団の魂のシンボルを明かしているんじゃないだろうか。（82）

ツヴァックによると、ゴーレムとは、ゲッターに住む人々の蓄積した思考の爆発、つまり魂の爆発から生まれた「幽霊」である。たしかにこの箇所ではゴーレムは、ショーレムが「淀んだ残滓すべてをそなえたゲッターの具現化された集団の霊魂」と名付けたように、ゲッターの住人たち自身の不安の反映であるように思われる。しかしこうした彼らの不安も人造人間ゴーレムとの関係から次のように語られている。

そして、蓄積された大量の思考が日常の壘壁をかじろうとする幻のような試みのなかで、次のような苦悩に満ちた確信が一貫して続いている。つまり、妖怪の姿が立体的になるためだけに、我々の内にあるもっとも固有のものが計画的に、我々の意志に反して吸い尽くされているのだという苦悩に満ちた確信だ。（83）

こうしたツヴァックの「苦悩に満ちた確信」は、肉体を求めるゴーレムによって人間の魂が日々脅かされているということを明らかにする。「幽霊」として生まれてきたために物質的な肉体を備えていないゴーレムは、「物質的な生」(86)を求めて人間の魂に襲いかかるのだ。ゴーレムが人間の魂を吸い尽くして、人間の体を占領しようするということは、人間がゴーレムと化す危険にさらされていることの裏返しでもある。

同様にペルナートがこの街の人々をゴーレムのようだと感じるとき、ここにもまた自然法則に反した生の営みに対する不安が表れている。

そのときわたしのなかで幽霊のようなゴーレムの伝説が、あの人造人間の伝説がそっと目を覚ました。カバラーに精通したラビが、かつてこのゲットーで諸元素からゴーレムを形作り、歯の裏に魔術的な数にかかわる言葉を押し込んで、考えることはできぬが自ら動く存在にしたのだ。

ここに住む人々も、ちょうどゴーレムが生命の秘密の音節を口から奪い去られた瞬間に粘土の像に凝固したように、もし彼らの脳裏にあるなにか些細な考えや瑣末な企てが、おそらくある人にとっては何の役にもたたない習慣が、そして別のある人にとってはなにかまったく不確実でとりとめもないものへの漠然とした期待にすぎないものが消し去られるならば、一瞬にして魂を失ってくずおれてしまうにちがいないと、わたしにはそんなふうに思える。(45)

このようにペルナートは、考えることをやめた途端に人間もゴーレムのように一瞬にして魂を失ってしまうにちがいないという疑惑を抱いている。こうしたペルナートの疑惑は、人間とゴーレムとの線引きの曖昧さに対する不安の表出である。いま引用した箇所直前でペルナートは、ゲットーの古い建物こそ街路の本当の主人であり、住人たちはみなゴーレムと化しているのではないかと考えている。伝説の人造人間ゴーレムがラビによってその生命を支配されていたように、ゲットーに住む人々の生命もまた、彼らのものではないのだ。ここには、人間もまた死んで土に返れば、魂を抜かれて土に戻るゴーレムと大差ないのではないかという疑惑、そしてなによりも、人間の魂でさえもゴーレムに宿るかりそめの魂と大差ないのではないかという疑惑が頭をもたげている。この疑惑はツヴァックにも共通して見出せるものであり、この意味で、ゲットーの住人たちには、自らの生命が自らによって支配できないという不安がつきまとっていると言える。これはまさに、故郷を持たないというゴーレムの在り方の反映であるといえる。

ただし、ペルナートを含むゲットーの住人たちの存在が、彼ら自身の鏡像であるドッペルゲンガーによってではなく、各人を越えたゴーレムの存在によって規定されているといことは、彼らの思考の表出もまたゴーレムの伝説と関係していること

を示唆している。ここで再びペルナートの頭のなかの「部屋」に注目したい。ペルナートの頭のなかの「部屋」とゴーレムが住むという「出入口のない部屋」との連関にはペルナートが意識していないもう一つの連関がある。それは、ゲッターとの連関である。つまりゴーレムの住む「出入口のない部屋」は、ゴーレムと化した住人たちにとってはゲッターという街の隠喩として機能している。小説『ゴーレム』に寄せた解説文のなかで、エドゥアルド・フランクは、「出入口のない部屋」が「一つの時代の経験を象徴する」⁷⁾ことを指摘している。フランクによれば、それゆえにこそペルナートが自身のゴーレム的な在り方を克服し、真の自己を見出そうとする試みには「三次元の現実の境界を乗り越え、上へと飛び上がろうとする可能性が示される」⁸⁾のである。そして、ゲッターの住人たちもまたゲッターの境界を越えて、自らの生命をゴーレムの手から自らの手に取り戻そうとしているのかもしれない。とりわけ、ツヴァックの語った、ゲッターに住む人々の思考の「蓄積」と「爆発」という表現は、ゲッターの境界を越えたいという住人たちの願いが現れたものであるだろう。思考が外へと放出されることなく「蓄積」されるというツヴァックのイメージには、必然的にゲッターの内と外との境界が前もって設定されていなくてはならない。すなわち、本来ならばプラハの一部であるはずのゲッターは、あたかもプラハの街から隔離された一個の空間であるかのように浮かび上がっているのだ。そして、ゲッターの住人たちが異物として排出した思考の「爆発」は、ゲッターの境界を打ち壊す可能性をひめたエネルギーの放出と考えられる。

2. ゴーレムという病

こうしたペルナートやゲッターの住人たちの存在を規定する桎梏としてのゴーレムは、物理的な病の隠喩としても機能している。ゲッターを徘徊するゴーレムは、「精神の伝染病」(81)と呼ばれているが、このことは、作中、ゲッターに蔓延していると言われる伝染病「チフス」(468)とゴーレムとの連想を示唆している。たしかに、小説の舞台となった 19 世紀末のプラハの公衆衛生に関する報告書にあたってみると、そこには、「チフス」がこの土地に根付いた病気であったことが記されている。⁹⁾しかし、小説『ゴーレム』では、そうした理由によってのみ「チフ

⁷⁾ Frank, Eduard: Nachwort. In: Der Golem. München (Langen-Müller) 2004, S. 317. この解説文の冒頭には「ほぼ6年前にグスタフ・マイリンクの『ゴーレム』(1915)が出版されたとき」とあるので、フランクはこの解説文を 1921 年頃に書いたであろうと推定される。

⁸⁾ Ebenda, S. 317.

⁹⁾ Vgl. Möbius, P. J. u. H. Dippe (Hrsg.): Schmidt's Jahrbücher der in- und ausländischen gesammten Medicin, Bd. 236. Leipzig (Wigand) 1892, S. 262 f.; Melinz, Gerhard u. Susan Zimmermann: Die aktive Stadt — Kommunale Politik zur Gestaltung städtischer Lebensbedingungen in Budapest, Prag und Wien (1867–1914). In: Wien – Prag – Budapest: Blütezeit der Habsburgermetropolen; Urbanisierung, Kommunalpolitik, gesellschaftliche Konflikte (1867–1918). Hrsg. von Gerhard Melinz u. Susan Zimmermann. Wien (Promedia) 1996, S. 151.

ス」という病名が用いられているのではない。というのも、「チフス」が、「煙・霧」ないしは「ぼんやりとした感覚」を意味するギリシャ語を語源とするように、¹⁰⁾ 昏睡状態や精神錯乱といった意識障害を引き起こすことを特徴としているからである。現に、ゲッターの住人たちはペルナートのことを「気の狂った (verrückt)」（494）人とみなし、「病気」（130）だと言っている。ここで精神障害は病気的一种とみなされているのである。このように考えると伝染病「チフス」とは、ゲッターに蔓延する「精神の伝染病」であるゴーレムの象徴的表現と言えることができる。

こうした「チフス」ないしは「精神の伝染病」の蔓延は、プラハのゲッターが、それだけ近代化に乗り遅れていることを示唆しているだろう。現にこの小説の舞台となった 19 世紀末のプラハのゲッターは、貧民街と化し、伝染病の蔓延する不衛生な街であった。マイリンクは、こうした当時のゲッターを目の当たりにし、その不衛生な雰囲気をつこの小説のなかに写し取っている。¹¹⁾ 「ゲッターの建物はみな、なんと不気味に落ちぶれて見えることか！」（43）と驚くペルナートの目には、ゲッターの建物は「不機嫌な、年老いた動物のよう」（43）に映る。

建物がみな、言いようもない悪意に満ちた陰険な顔つきで私のほうを凝視しているかのように思えた。入口は、大きく開かれて暗く、舌の腐り落ちた口、今にもかん高い叫び声をあげそうな猛獣の口だ。その叫びはとてかん高く憎悪に満ちているので、我々を骨の髄まで驚かせるにちがいない。（64）

ぞっとするような獣たちの巣窟としてのゲッターは、単に街の不衛生さを強調するものではない。こうした獣の比喻は、ゲッターが行政による管理の行き届いていない野放しの無法地帯であることを明らかにする。この意味で、ゲッターはオーストリア＝ハンガリー帝国の社会秩序を脅かしている。物語の終盤、オーストリア＝ハンガリー帝国の政府は、「チフス」を根絶するためにゲッターを取り壊す措置を採っている。¹²⁾ つまり、このようなゲッターを取り壊して伝染病を無理やりに除去することは、国家権力の行使と強制を意味しているのだ。19 世紀末のプラハにおいて施行された衛生化措置の目的は、無差別な死をもたらず伝染病との戦いを建前にした、権力、ないしは法による帝国主義的な統制の拡張に他ならない。20 世紀の初

¹⁰⁾ Drosdowski, Günther (Hrsg.): Duden »Etymologie«: Herkunftswörterbuch der deutschen Sprache. 2., völlig neu bearb. u. erw. Aufl. Mannheim, Wien u. Zürich (Dudenverlag) 1989, Art. „Typhus“, S. 765.

¹¹⁾ カフカは、この小説にみられる古いユダヤ人街の不衛生な雰囲気、衛生化措置後の街よりも「現実的」であると評している。Vgl. Janouch, Gustav: Gespräche mit Kafka. Frankfurt a. M. (Fischer) 1961, S. 46.

¹²⁾ 衛生化措置は、19 世紀末のオーストリア＝ハンガリー帝国において施行された。三谷 研爾：世紀転換期のプラハ——モダン都市の空間と文学的表象（三元社）2010，173 頁参照。

めの公衆衛生の分野においても、「病気が社会を侵略する」という隠喩が用いられ、病気を根絶する努力が「戦い」、「闘争」、「戦争」と呼ばれていた。¹³⁾ 病としてのゴーレムは、ゲットーの外のプラハの街ないしはオーストリア＝ハンガリー帝国の政府にとっては、排除すべき害悪とみなされるのである。

3. ゴーレムと殺人事件

3.1. 人造人間ゴーレムの伝説とゲットーの守護者

以上のように、この小説において「チフス」の隠喩であるゴーレムは、排除すべき異物ないしは害悪とみなすことができる。さらに、こうしたゴーレムは、「チフス」がついには死をもたらすように、殺人事件とも関係づけられている。しかし、ゴーレムの場合は、「チフス」とは異なり、人間を無差別に襲うことはない。むしろ、この小説のなかで起こる事件は、主として弱者の強者に対する抵抗としてみなしうる。というのも、作中には、ゴーレムが、迫害に苦しむユダヤ人の守護者として登場する伝説への仄めかしが散見されるためである。とりわけ、ペルナートやゲットーに住む人々の前に現れるゴーレムが、プラハにおいて語り継がれてきた伝説に登場するゴーレムであると幾度も強調されるとき、ゴーレムが関係する殺人事件もまた、本来のゴーレム伝説から何らかの影響を受けているであろうことは想像に難くない。ただ、小説『ゴーレム』においては、このゴーレム伝説について詳細が述べられていないので、次に伝説の内容を概観することとする。

『出エジプト記』に記されているように、神は奴隷の身分にあるユダヤの民を救うために全エジプトに 10 の災いをもたらした。その一つに長子の殺害というものがあり、エジプト中の子供が殺された。しかしユダヤ人の家には、神が前もって門戸に子羊の血を塗るようにと命じたので、それを目印に神は何もせずに通り過ぎた。以来ユダヤ人は、過ぎ越しの祭りの際、神に感謝を捧げるために種無しパンを食べるようになった。ところが、キリスト教徒によってあらぬ噂が立つようになる。その噂とは、ユダヤ人が過ぎ越しの祭りの際キリスト教徒の子供を攫って殺害し、種無しパンにその血を混ぜているというものである。そしてユダヤ人の家の前でキリスト教徒の子供の死体が見つかる事件が起こる。しかし実際にはこれはユダヤ人迫害をもくろむキリスト教徒の犯行であったのだ。こうしたキリスト教徒によるユダヤ人に対する迫害は「血の中傷」と呼ばれ、ヨーロッパに住むユダヤ人たちを幾度も脅かしてきた。20 世紀初頭のプラハの伝説においては、こうした「血の中傷」を起因とする迫害からユダヤ人を守るために、ラビ・レーフはゴーレムを作り、下僕として用いたと言われている。¹⁴⁾ おそらくマイリンクは、この同時代に書きとめ

¹³⁾ Vgl. Sontag, Susan: AIDS and Its Metaphors. New York (Farrar, Straus and Giroux) 1989, S. 10.

¹⁴⁾ Vgl. Rosenberg, Yudi: The Golem and the Wondrous Deeds of the Maharal of Prague. Translated from Hebrew by Curt Leviant. New Haven and London (Yale University Press) 2007, S. 10–14, 44–49, 95–112. ローゼンベルクは、1909 年ポーランドにて、ヘブライ語の初版を出版後、同年、これ

られた伝説に通じていたであろう。作中用いられている「種無しパン焼き職人」(20) ないしは「種無しパンを持った聖職者」(235) といった表現や、種無しパンに関する俗謡は、この伝説を暗に示していると考えられる。¹⁵⁾ とりわけ殺人事件の犯人のひとりが、「種無しパン焼き職人」の息子であることは、殺人事件とこの伝説とのつながりを示唆しているように思える。

小説『ゴーレム』において披露されるゴーレム伝説のパリエーションは 17 世紀に成立したものであるが、ここでもすでに、ゴーレムは、製造者であるラビの下僕として働いている。

物語の起源はおおよそ 17 世紀にさかのぼると言われている。その時あるラビが、カバラーの今はもう失われた規定書に従って、人造人間を——いわゆるゴーレムを——下僕としてシナゴグの鐘を鳴らす手伝いやさまざまな荒仕事をさせるためにこしらえたそうだと。

しかしそこからはまともな人間ができず、彼には鈍感な、半分しか意識のない植物のような生命しか宿らなかった。それも昼間だけのことで、魔法の紙切れの影響力によっていた。その魔法の紙切れはゴーレムの歯の裏に差し込まれ、宇宙の星の自由な諸力を引っ張り下ろすそうだと。

ある晩、ラビが夜の祈りの前にゴーレムの口からしるしを外すことを忘れたそのとき、ゴーレムは狂乱状態に陥り、暗闇のなか横町中を荒れ狂い、道で出くわしたものを粉々に打ち砕いた。ラビが体当たりして紙切れを処分するまでそれは続いた。

そしてそのこしらえものはその場で命を失ってくずおれたそうだと。後に残ったものは小人のような粘土の人形だけで、それは今日でもなおアルトノイシナゴグで見ることができるんだ。(74) ¹⁶⁾

をイディッシュ語に訳して出版している。出版後、瞬く間にヨーロッパ中に広まったこの書物は、1917 年にハイム・ブロッホによってドイツ語に訳されている。

¹⁵⁾ ここでマイリンクは、ヘブライ語で種無しパンを意味する「マッツァー」ではなく、キリスト教の用語である「ホスチア」を用いているが、この小説のなかでは「ホスチア焼き職人」である人物も「ホスチアを持った聖職者」と形容される人物もともにユダヤ人であることが言明されている。

¹⁶⁾ ここには本来の伝説にはない要素が付け加えられている。とりわけここに星の力への言及があるが、このことは古代ギリシャの自動人形が星の影響を受けて作動すると考えられていたことと関係しているように思える。なぜなら、こうしたプラトンのともいえる要素が、ゴーレム伝説の発展において積極的に取り込まれてきたからである。Vgl. Idel, Moshe: *Der Golem, jüdische magische und mystische Traditionen des künstlichen Anthropoiden*. Übersetzt von Christian Wese. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 2007, S. 23. また、「シナゴグの鐘を鳴らす」とあるが、実際のシナゴグに鐘は置かれていない。この矛盾について先の自動人形と合わ

とはいえこのゴーレム伝説には、ゴーレムの従順な下僕としての側面だけでなく、破壊者としての側面もまた描かれている。この一見したところ相反する二つのゴーレムの顔は、命の源である護符が体から取り外されるか否かということと連動して切り替わっている。つまり、ゴーレムは、定められた時刻までは従順な下僕として働くが、その時刻になっても体から護符が外されず、休息が得られない場合は、ラビに反抗して暴れ出すのである。こうしたゴーレム伝説の構成要素は、マイリンクによる創作ではなく、本来のゴーレム伝説にも見られるものである。ヴォルフ・パシェレスによって編纂されたユダヤの説話集『シップリム』（1870）¹⁷⁾に収録されている 17 世紀のゴーレム伝説にも、ゴーレムが暴れ出した原因が次のように語られている。¹⁸⁾

この説話集によると、ラビであるレーフは、言葉は喋れぬが「本当の人間のように」¹⁹⁾働く下僕を粘土から作り出した。このゴーレムは一週間働いた後、安息日である金曜日の日没から土曜日の日没までは休息をとる決まりになっている。そのためにレーフは安息日が始まる前にゴーレムの口から護符をはずさねばならないのだが、一度だけ安息日の前にゴーレムから護符をはずすことを忘れてしまう。するとゴーレムは荒れ狂い、建物を破壊し、あちこちに岩塊を投げつけ、木々を根こそぎ倒して辺り一帯を混乱に陥れた。

ここでも、従順な下僕から反抗的な破壊者へのゴーレムの態度の変化は、定められた時刻を越えても休息が得られないことによって起こる。ゴーレムは、時間外労働というラビの契約違反に対して怒りを露わにしているのである。この点において、ゴーレムが物理的な体を持つことは、労働することを意味している。小説『ゴーレム』において、ゴーレムは肉体を持たない「幽霊」として登場するが、ゴーレムの魂が「物質的な生」を求めて人間に襲いかかる理由は、伝説のゴーレムと同様に、何らかの仕事に従事するためだ、とも考えられるのである。

ただし、この小説に登場するゴーレムは、ゲッターに住む人々の思考が、「集団の霊魂」として表出されたものであり、その働きは、ユダヤ人一般というよりは、ゲッターの住人たち——特に貧困にあえぐ人々——のためにあると言える。この小説の舞台となった 19 世紀末のプラハのゲッターは、ユダヤ人街というよりも、貧しいキリスト教徒も含む貧民街と化していた。マイリンクが、こうした歴史的な事実

せて考えるならば、時を知らせる鐘を撞くゴーレムというのは、時計の仕掛けに端を発する自動人形に重ねられているのではないだろうか。

¹⁷⁾ Weisel, Leopold: Sagen der prager Juden. In: Sippurim, Eine Sammlung jüdischer Volkssagen, Erzählungen, Mythen, Chroniken, Denkwürdigkeiten und Biographien berühmter Juden, in 2 Bänden. Hrsg. von Wolf Pascheles. Prag (Pascheles) 1858.

¹⁸⁾ 『ゴーレム』の最終章にはペルナートがパシェレスと呼び間違えられている箇所がある。また、パシェレスの説話集には、他の記録には見られない幻灯機への言及があり、この小説と同じようにレーフは幻灯機の発明者であると記されている。

¹⁹⁾ Weisel, a.a.O., S. 51.

を踏まえてゲッターを描き出していることは、作中、ゲッターに住むキリスト教徒たちについての記述からうかがい知ることができる。「この地区のキリスト教徒たち」（235）が、貧しいユダヤ人のことも「吝嗇家」（235）ないしは「隠れた百万長者」（235）とみなしている。このことは、ゲッターに住むキリスト教徒たちもまた生活に窮していることを示している。ゲッターの内部にあるのは、圧倒的多数の貧者と少数の富者という構図である。「集団の霊魂」においてはこの貧者の思考すなわち、彼ら貧者を救済しようという力が、優位を占めていることになる。

3.2. 幽霊としてのゴーレム

以上の認識をもとにすれば、ゴーレムが、ゲッターに住む貧しい人々にとっては、脅威を与える存在ではなく守護者であることが分かる。それがたとえゲッターの住人たち自身によって誤解されていようとも。ツヴァックによればゲッターにゴーレムが現れるときには必ず殺人事件が起こるのだが、事件の背景に鑑みるならば、ゴーレムに関わる事件は、たしかに殺人という陰惨な意匠を施されてはいても、必ずしも倫理的な動機を欠いているのではないことが分かる。そこでまず、この物語の縦糸となる3件の殺人事件に目を向けたい。第1の被害者であるドクター・ヴァッソリは、患者をだまして私腹を肥やしている。そしてこの不正を暴かれかけたとき、追い詰められたヴァッソリは自殺を選ぶ。ヴァッソリの事件のかたわら、ゲッターでは第2の事件、カール・ツォットマン殺人事件が起きている。ツォットマンは少女暴行の常習犯でありながら、警察と癒着していたために刑罰を免れていた老人である。そして第3の被害者は、ヴァッソリに学資を支援した古物商人ヴァッサートルムである。彼はゲッターの3分の1を所有する百万長者であり、ペルナートの両親から財産を奪った張本人である。こうした殺人事件の裏で、ゲッターの住人たちはゴーレムの幽霊が出現したことを噂している。

ここで事件の内実を目を向けてみると、被害者がみな、不正を働きながら公的には罰せられていない人物たちであることが分かる。この点で、この小説の殺人事件は、幽霊譚の一形態に近いものがあると言える。幽霊は、しばしば「人間らしい社会正義の伸ばされた腕」²⁰⁾として現れ、悪人や犯罪者を直接的・間接的に暴き出し、これを罰する。こうした幽霊の行動は、生前に受けた不正な仕打ちに対する意趣遣恨を動機としている場合もあれば、不正から生者を守ることを動機としている場合もある。小説『ゴーレム』における殺人事件の動機は後者にある。ここで警察は、権力に阿り、ゲッターに住む貧しい人々のために働くことはない。ツヴァックは、オーストリア＝ハンガリー帝国の警察を「国のならず者」（189）と呼んでいる。こうした蔑称は、警察が公正な社会正義としては機能していないことを明かす。そ

²⁰⁾ Von Wilpert, Gero: Die deutsche Gespenstergeschichte: Motiv, Form, Entwicklung. Stuttgart (Kröner) 1994, S. 21.

こで、幽霊となったゴーレムが、警察に代わって悪人を懲らしめるのである。ゴーレムとの関連がささやかれる殺人事件は、腐敗した行政に対する抵抗の一形式とみなすことができる。²¹⁾

4. ペルナートの内面的成長

4.1. 結社への帰属

ペルナートもまたオーストリア=ハンガリー帝国の被抑圧者であるが、ペルナートの場合は、自身のうちにゴーレムを認識することによって、ゲットーの住人たちとは異なる道を開いている。ヴァッサートルムの奸計によってツォットマン殺害の嫌疑をかけられたペルナートは、「オーストリア=ハンガリー帝国の高等検察庁」(460)に長期間拘留されることを余儀なくされる。ペルナートは自らの冤罪を主張するが、この申し立てが裁判所に聞き入れられることはない。なぜなら裁判所はアルファベット順に審理を行っており、それゆえ、「ペ (Päh)」(461)で始まるペルナートの審理は後に回されたためである。こうしたこともありペルナートはオーストリア=ハンガリー帝国のお役所仕事に対して嫌悪を抱くようになる。警察組織と同様に、ここでもまた、裁判所長官は「「上流社会」のならず者」(393)であり、予審判事はその「追従者 (Leisetreter)」(387)である。ペルナートが、釈放されたのちも、生まれ故郷であるブラハの市街地に戻らずに、ゲットーに留まった理由は、こうしたところに求められるであろう。

とはいえ、ペルナートは、ゲットーに住んではいても、ゲットーの住人たちの生活様式に同化することはない。そもそも拘留される以前からペルナートはゲットーの住人であったが、彼がゲットーの住人たちに向ける視線は、傍観者のそれであった。そのうえ、ペルナートが釈放されたときにはすでに、ゲットーは衛生化措置によって瓦礫の山と化しており、住人たちはどこかへ消えている。たしかにペルナートは、オーストリア=ハンガリー帝国にも、ゲットーにも帰属することができない。しかし彼は完全に孤立しているのではなく、「夜明けの光が昇る会 (CHABRAT ZEREH AUR BOCHER)」(271)という結社の一員である。「夜明けの光が昇る会」の詳細については次節に譲るとして、ここではペルナートがこの結社へ加入する際、ゴーレムが果たす役割について確認したい。

人間の顔が長い列をなしてわたしのそばを通り過ぎていく。わたしはまぶたを閉じた——硬直したデスマスク——わたし自身の一族、わたし自身の先祖たち。タイプは違って見えても、つねにおなじ形をした頭蓋が墓穴から起きあがってくる。

²¹⁾ 『ゴーレム』以前のマイリンクの作品は、とりわけ政治的風刺雑誌『ジンプリチシムス』に掲載されていたこともあり、社会政治批判として評価されていた。Vgl. Qasim, Mohammad: Gustav Meyrink. Eine monographische Untersuchung. Stuttgart (Heinz) 1981, S. 75–118.

分け目のつけられた滑らかな髪を持つ頭蓋や、短く切られた巻き毛をした頭蓋、男性用かつらをつけた頭蓋に、輪っか状にひつつめられた髪をした頭蓋——幾世紀にもわたり、次第にわたしの知っている顔立ちまできて、最後の一つに合流した。それはゴーレムの顔で、それをもってわたしの祖先の行列は途絶えた。

(267)²²⁾

ここでペルナートは、ゴーレムが自らに内在していることを認識している。祖先たちの顔がゴーレムの顔に「一つに合流した (zusammenfließen)」とは、ペルナートの内なるゴーレムの顔が祖先の特徴を受け継いでいることを意味しているであろう。とりわけペルナートの祖先の髪型に注目すると、たしかに、「祖先の行列」はペルナートの遺伝学上の祖先と言えるかもしれない。「男性用かつら (Allongerperücke)」や「輪っか状にひつつめられた髪 (in Ringe gezwängte Schöpfe)」は、どちらも 17 世紀から 18 世紀にかけてヨーロッパ上流階級のあいだで流行した髪型である。またペルナートの「祖先の行列」が古い時代から新しい時代へと続いていることを考え合わせるならば、「短く切られた巻き毛」は男性の頭髪であろう。同様にペルナートの指導者であるヒレルが、ゴーレムを「死者の目覚め (die Erweckung des Toten)」(131)、ないしは「幽霊 (ein Gespenst)」(131)と呼んだ際に現れるヒレルの祖先の幽霊も、ラビの衣装を着ていることから、みな男性であると推測される。²³⁾ こうしたことから、一見すると、ペルナートの「祖先の行列」は実在した父たちによって構成されているかのようである。

しかし、ペルナートの祖先の顔は、最終的にペルナートの顔にではなく、ゴーレムの顔に「一つに合流した」のである。とすると、この集団は自然な遺伝の法則に適う祖先の集団とは言い難いように思われる。現に、遺伝についてこの小説のなか

²²⁾ 小説『ゴーレム』に描かれる自我の統一について、マリアンネ・ヴンシュは、心理学的・精神分析学的見地からゴーレムを二つの類型に分類する。ヴンシュは、ペルナート自身に固有ではないものとして共時的な社会的集団を、ペルナート自身に固有のものとして通時的な生物学的集団を挙げ、共時的な社会的集団の例として、先にショーレムが指摘したゲッターの「集団的靈魂」を引合いに出す。ヴンシュによれば、自然主義が生物学的・社会学的言説を引合いに出して以来、主体は生物学的、ないしは社会学的に決められた共同体に従属するか、もしくはそうした相対性から自律性へと、主体の権利を回復するかのどちらかを選択してきた。つまり、主体は権利を回復できなければ集団に従い、権利を回復した場合は集団を非個人的なものとして排除するのだ。Vgl. Wunsch, Marianne: Die fantastische Literatur der frühen Moderne (1890–1930). München (Fink) 1991, S. 244.

²³⁾ フーゴー・シュタイナー＝プラークによる挿絵にも、ヒレルの祖先の幽霊は、みな男性として描かれている。Meyrink, Gustav: Der Golem mit acht Bildern nach Lithographien von Hugo Steiner-Prag. München (Wolff) 1922, S. 184. ここに収められている挿絵は、1915 年に『ゴーレム』が出版された直後に、シュタイナー＝プラークによって描かれたものである。このシュタイナー＝プラークによる銅版画は、1916 年には正式に採用され、挿絵として小説中に挿入されている。Vgl. Binder, Hartmut: Gustav Meyrink. Ein Leben im Bann der Magie. Prag (Vitalis) 2009, S. 510.

では次のように説明されている。

あなたを取り囲んだ青みを帯びて輝く人々の輪は、母親から生まれたものならだれもが引きずっている、遺伝した ‚Iche‘²⁴⁾ の鎖でした。魂は「単独のもの」ではありません。魂はまず「単独のもの」にならねばならない。そしてそれを「不滅」と呼ぶのです。あなたの魂はまだ多数の ‚Iche‘ から成り立っています。——ちょうど蟻の国が多く蟻から成り立っているように。あなたは、何千何万というあなたの先祖の魂の残余を、あなたの一族の頭をあなたのうちに持っているのです。全ての生きものがそうなのです。数百万年の経験がうちに潜んでいるのでなければ、卵から人工的に孵化されたにわとりが、いったいどうやってただちに本物の餌を探し求めることができるのでしょうか。「本能」が実際にあるということが、身体と魂のうちに先祖の現前を示しているのです。(443 f.)

ここでは、遺伝は祖先の「魂の残余」を受け継ぐことだと言われている。このことは、ゴーレムに「一つに合流」しているのが、いわゆる生物学が提示するような血ではなく、物質的な実体としては捉えることのできない魂であることを示唆している。

4. 2. ゴーレムの製造——石の彫琢

なぜペルナートの祖先の魂は、ペルナートではなくゴーレムに流れ込むのであろうか。この様子を冷静に観察しているペルナートの位置から、ペルナートとゴーレムとは同一人物ではなく、向かい合う別の人物であることがうかがい知れるだろう。このようにゴーレムに対面するペルナートの位置は、ペルナートがゴーレムを製造

²⁴⁾ ここでマイリンクは、Ich の一般的な複数形 Ichs ではなく、Iche を用いているので、本論では、原文をそのまま引用した。Vgl. Grimm, Jacob und Wilhelm, a.a.O., Bd. 5, Art. „Ich“, Sp. 2017–2031. グリムの辞書には、一人称単数 Ich の中部ドイツ語方言として Iche の形と、複数形としての用法が記載されている。この小説において括弧にくられた ‚Iche‘ は、冠詞の有無から判断して、方言ではなく、複数形として用いられていると考えられる。小説『ゴーレム』の日本語版において ‚Iche‘ は「自己群」と翻訳されている。今村孝訳：ゴーレム（河出書房）1978, 324 頁参照。英語版では、1929 年に上梓された時には personalities という語が用いられていたが、その後、マイリンク研究の第一人者マイク・ミッチェルが新訳として当該箇所を ‘selves’ に変更している。Vgl. translated by Pemberton, Madge: The Golem. London (Victor Gollancz) 1928, S. 253.; translated by Mitchell, Mike: The Golem. UK (Dedalus) Reprinted in 2013 (first published in 1995), S. 234. また『ゴーレム』の他に短編『J・H・オーベライト、時間蛭を訪ねる』（1916）においても、マイリンクは Ich の複数形として Iche を用いているが、ここでも Iche は、生者ではなく、死者を指している。Vgl. Meyrink, Gustav: J. H. Obereits Besuch bei den Zeitegeln. In: Der kardinal Napellus. Hrsg. von Jorge Luis Borges. Frankfurt a. M., Wien u. Zürich (Gutenberg) 2007, S. 25.

する側にいることを示しているように思われる。それというのも、祖先の魂がゴーレムへと流れ込む様子は、ゴーレムに靈魂を吹き込む工程と重ねられるからである。

とりわけ、こうした推測を支持するのは、ペルナートが属する「夜明けの光が昇る会」の存在である。この結社の名前にマイリンクが採用した **CHABRAT ZEREH AUR BOCHER** という固有名詞は、19 世紀初頭にフランクフルトで創設されたフリーメイソンのユダヤ系ロッジ **Die Loge Aurora zur aufgehenden Morgenröte** のヘブライ語である。²⁵⁾ ここで、フリーメイソンが石工組合から発展した結社であることを考え合わせるならば、この結社への加入とゴーレムの出現との間に論理的な必然性を見出すことができる。それというのも、作中、ゴーレムと石とは、互換性を持っているからである。つまり、ペルナートは、この結社に加入する資格を得るために、石に靈魂を込めてゴーレムを作り出すのである。²⁶⁾

たしかに、石のモチーフは、この小説の冒頭から末尾まで一貫して重要な位置を占めており、ペルナートの内面的な成長の指標ともなっている。小説の冒頭において、一人称の語り手が、ブラハのホテルの一室でブッダの伝記に思いを巡らせながら眠りにつくところからすでに、物語は石のモチーフでもって始まる。

一羽のカラスが一片の脂身のように見える石のところへ飛んできた。そして、ひょっとするとここには何かうまそうなものがあるぞと考えた。カラスはそこうまそうなものを見つけなかったので、飛び去った。石に近づいたカラスのように、我々、我々誘惑者たちは、苦行者ゴータマのもとを、彼に興味を失うと去っていく。(8) ²⁷⁾

ここで苦行者ゴータマは、「脂身のように見える石」に喩えられている。なぜ石が「脂身のように見える」のであろうか。それは、石の表面が滑らかに磨き上げられているからにちがいない。つまり、「脂身のように見える石」とは、苦行者ゴータマの精神的修練の賜物であると言える。そしてこの磨かれた石は、宝石細工師と

²⁵⁾ Vgl. Scholem, Gershom: Briefe / 3: 1971–1982. Hrsg. von Itta Shedletzky. München (C. H. Beck) 1999, S. 367 f. ただし、ショーレムによれば、**CHABRAT ZEREH AUR BOCHER** というヘブライ語は、マイリンクが所蔵していた英語の本のなかに見いだされる誤訳である。ここで、ユダヤ系ロッジである **Die Loge Aurora zur aufgehenden Morgenröte** の名前が、キリスト教神秘思想家ヤーコブ・ペーメの主著『アウローラ ——明け初める東天の紅 **Aurora oder Morgenröte im Aufgang**』(1612) という標題と非常に似ている点は興味深い。

²⁶⁾ 現に、ユダヤの歴史においてゴーレムの製造は、奥義を極めた達人となったことを証するための通過儀礼とみなされていた。Vgl. KS. S. 227.

²⁷⁾ マイリンクは、1906 年にドイツ語に翻訳されたブッダの伝記からこの一節を引用したと考えられている。Vgl. Dutoit, Julius: *Das Leben des Buddha, eine Zusammenstellung alter Berichte aus den kanonischen Schriften der südlichen Buddhisten*. Leipzig (Lotus) 1906, S. 52.; Dunker, Axel: *Kommentar*. In: *Der Golem*. Stuttgart (Reclam) 2008, S. 315.

いうペルナートの職業への伏線となっている。というのも、夢の語り手は、「脂身のように見えているのはどの石か」（27）と尋問する声に頭を悩まされながら、寝てもいないし覚めてもいない状態で寝返りを打つと突然、場面はゲッターの薄暗い中庭に移り、語り手はアタナシウス・ペルナートと呼ばれる宝石細工師になっているからである。²⁸⁾そして、ペルナートは、宝石を彫る作業を通して「自らの国の支配者であり王」（135）となる。

ヒレルもまた鏡を磨くという比喻でもって、自らを支配するとはいかなることかをペルナートに語っている。「銀の鏡も感覚を持っているならば、磨かれるたびに痛みに悩むでしょう。しかし滑らかになり、輝くようになれば、銀の鏡はそこに映るあらゆる像を、悩みも怒りも感じずに映し出すのです。」（129）このあとにヒレルは、「自分は磨きぬかれていると言うことのできる人は幸いです」（129）と続けている。このことから、ここで鏡によって喩えられているのが人間あるいは人間の意識であることが分かる。鏡は他者を映し出す。たしかに、人間が社会的存在であり、換言すれば本質的に人間が自己とは異なる他者との並立的共存を求める存在であるならば、人間とは常に他者によって規定されており、また他者を反映していると言える。このようにして個人の人格の内部には必ずしも個人が統御することのできない他者が含まれている。これらのうち、比較的容易にその存在が感知されるのは、個人の属する特定の共同体の慣習ないし、その個人が母語とする言語といったものである。たしかに社会的集団は人為的な構築物であるという点においては自然でも不変的でもないが、一個人の意志によっては意識することはできても変化させることが困難なものである。こうした状況において、人間に可能なことは、自己の内にある他者の像を変化させることである。鏡は磨かれることで、その前に置かれたものの像をより鮮明に映し出す。

これを先述のペルナートと宝石との関係に当てはめるならば、宝石とはペルナートの内にある他者であると言える。現に、ペルナートが作中で熱中する仕事のうちの一つは、石に人の顔を彫りこむことであった。つまり、ペルナートが人間ならざるもの（宝石を含む石、あるいは鏡としての銀など）に彫琢を施し磨き上げるという工程は、個人を暗黙のうちに規定する桎梏としての非個人的なものを統御する試み、すなわち、個人が真に自己の主として君臨するための、自律性を獲得するため

²⁸⁾ こうして語り手は、ペルナートの人生のある一時期を追体験することになる。このことから、ジークリット・マイヤーは、『ゴーレム』における「ブラハのゲッターは単なる地理的な場所というだけでなく、夢の世界、ないしは内面世界」としての様相を呈すると指摘している。Vgl. Mayer, a.a.O., S. 198. たしかにペルナートの体験が語り手の夢であるならば、語り手の意識が、つまり語り手の体験がペルナートの体験に反映されていると考えられる。とりわけゴーレムが「顔の黄色い蒙古人のような男」（78）であることは、語り手が眠りに就く前に読んでいたブッダの伝記の影響を示しているだろう。また、こうした夢と現実の互換性は、ペルナートの人生が語り手の「無意識」の現れである可能性を示唆する。なぜなら、無意識は夢の形でもって現実の世界に自らの存在を表出するからである。

の道程と重なるのである。

こうして、作品の冒頭から重要な意味を与えられている「石」（を含む無機物）と、その石を彫琢し生命を吹き込む、という主題を考え合わせることで、私たちは、本稿の冒頭でも取り上げておいた、ゴーレムとドッペルゲンガーとの違いを、明確にすることができる。あらためて確認すれば、フロイトの「無意識」がもっとも顕著な一例であるように、個人の人格の内部には、自己自身でありながら個人が統御することのできない要素が存在している。こうした議論は必然的に自我の鏡像であるドッペルゲンガーに及ぶであろう。

ヒレルは、ゴーレムとドッペルゲンガーとを区別して、前者を「精製する（verfeinern）」（205）必要があると言う。この操作は、ゴーレムを生命のない物質に還元する。そもそも物質としてのゴーレムは、旧約聖書の詩篇第 139 章 16 節に初めて記されたものである。この箇所では人間は神に対して次のような賛歌をささげている。「あなたの目が、わたしのゴーレム（גִּלְמִי）を見られた。」²⁹⁾ ここに見られる「ゴーレム」というヘブライ語は、「無形・未定形のもの」を意味しており、ユダヤ教の伝承においては、人間になる前の段階にあるアダム、換言すれば、神によって靈魂を吹き込まれる以前のアダムの名前であると言われる。³⁰⁾ 周知のとおり、神はアダムとなる人型を土から作り出したのであるから、アダムになる以前のゴーレムとは土の塊を指している。すなわち「ゴーレム」とは、原初の間であるアダムになる可能性を秘めた、特別な素材、いわば魂の容器の原材料を指す記号である。このことを踏まえるならば、小説『ゴーレム』において石として表象されるゴーレムもまた、自然法則を越えた可変性——つまり、単なる物体でありながら、生命を内包し変化し得るほどの可変性——を備えた物質として読み込むことができる。こうした観点からドッペルゲンガーを見ると、その姿かたちは、自我の鏡像という定まった輪郭を持っており、それ自体で完結していると言える。

ここまで見てきたように、ペルナートの内面的な成長は、分裂した自我の統一ではなく、ゴーレムの製造（石の彫琢）に仮託されているのである。そして、こうした個人の内面的な成長に付随して、特定の結社への加入という外面的な変化ないし発展が生じるのである。ペルナートの場合も内面的な意識に変化が起こって初めて、その拠り所とする集団に変化が起こり、ゲッターという所与の共同体から結社へと移行したと言うことができる。

²⁹⁾ Elliger, K. u. W. Rudolph (Hrsg.): Biblia Hebraica Stuttgartensia. Stuttgart (Deutsche Bibelstiftung) 1967/77, S. 1218. גִּלְמִי 「ゴルミ」は、男性名詞 גִּלְמִי 「ゴーレム」に一人称単数の接尾辞が付いた形である。

³⁰⁾ Vgl. KS. S. 212 f. この同じ箇所では「ゴーレム」が、中世の哲学的な文献において、「未定形の質料」を意味する術語として用いられていることを指摘している。

おわりに

以上の論述から明らかになったゴーレムの役割は、毒をもって毒を制するホメオパシーに喩えることができるものであり、最終的にはゲッター内部のバランスを取り戻すためにこそ存在していると言えるであろう。たしかに、ゴーレムは「淀んだ残滓」として回復すべき病であり、取り除くべき異物であった。しかし、これを強制的に権力と合理性によって取り除き一掃しようとする試みは、万人にとって正当な措置でも、妥当な真理でもない。少なくともペルナートに、衛生化措置が残したものは、空虚な現実だけであった。衛生化措置によって「石の荒野」(469)と化したゲッターを前に、「人間は影のように歩み去っていく」(467)とペルナートが抱く虚しさは、ペルナートがゴーレムに託していた希望の裏返しであるだろう。そうであるならば、むしろゴーレムという毒や膿を自由に放出し作用させる方が、ホメオパシーにおける自然治癒力のようなものを生み出し、状況を望ましい方向に向かわせるに違いない。現に、ゴーレムはペルナートの目を自己の内面へと向けさせることで、彼の自律を促した。自らの内にゴーレムを発見したペルナートは、これを彫琢し、これに生命を与えることで、本来ならば、奥義を極めた達人によってしか到達できない境地に、奇跡的に達するのである。同様にゲッターの住人たちにとってゴーレムの働きは、ゲッターの内にある異物を自らの力によって排出しようとする試みであった。マイリンクが小説『ゴーレム』において展開した世界は、不気味なゴーレムが出没し陰惨な殺人事件が頻発する病んだ世界であったが、その病は、いわば患者が自らの生命力によって治癒することのできる類の病であり、そうであるがゆえにマイリンクは、彼のゴーレムに、この逆説的な自浄作用を託したのである。

**Die Rolle des Golem im Roman „Der Golem“
von Gustav Meyrink
— Als eine Metapher der Krankheit —**

N A K A O K A S h o k o

Zusammenfassung: Die vorliegende Untersuchung beschäftigt sich mit dem negativen Wesen des Golem im Roman „*Der Golem*“ von Gustav Meyrink. Zwar befällt der Golem, der der Doppelgänger des Protagonisten, Athanasius Pernath, und die materialisierte Kollektivseele des Ghetto ist, metaphorisch die Lebenden im Ghetto als Typhus, aber er bringt sie nicht unterschiedslos ums Leben. Er tötet nur die, die Verbrechen zu begehen pflegen, aber durch ihre intimen Beziehungen zur k.u.k. Polizei jeder Strafe entgehen können, konkret gesagt: Dr. Wassory, Karl Zottmann und Aaron Wassertrum. Bei dem Golem handelt es sich nämlich in Wahrheit um einen Beschützer der Armen, d. h. der meisten Bewohner des Ghettos. Zudem ist der Golem nicht bloß der Doppelgänger, das Spiegelbild Pernaths, sondern der Andere aus dem Stein, den der Gemmenschneider Pernath so glatt und glänzend poliert, daß er wie ein Stück Fett aussieht, und beseelt ist. Also müssen wir die Rolle des Golem von Meyrink aufwerten als eine Art von Krankheit, die nicht von der Assanierung vernichtet werden muss, sondern in homöopathischer Weise die Selbstheilungskräfte der Ghetto-Bewohner wiederherstellt.